



▲吹き抜けの広がり大きな窓がクリニックであることを忘れさせてくれるリハビリ室。患者の評判も上々だ。

当時、吉村氏は時間外労働や当直の多さなどはまったく苦にならなかった反面、運ばれてきた患者の生命を維持することにのみ重点が置かれ、実際の治療はほとんどが他科任せという救命救急に対する物足りなさを感じていた。また、臨床麻酔のあり方とそのメカニ

ズムの解明については、かなり早い段階から限界を感じていた。94年からは、大学院に入って麻酔の研究に従事したものの、結局は2年間で中退。そのまま医局を離れて、新たな道を模索することになった。「麻酔、ICUでは、人間の体を中枢神経系、循環器系、呼吸系などのシステムで分割して考え、それぞれのシステムに異常がないかという観点から診断し治療していました。しかし、重症の患者さんに関してはそのような考え方で十分治療が可能な一方、多くの患者さんの治療を行ううえで基本となるのは、やはり人間の体そのものではないか、と思うのです。」

私が大学院在籍中にアルバイトでお世話になったある整形外科病院の先生方は、外来で頭を打った子どもからお年寄りの足のつま先の水虫にいたるまで、ありとあらゆるパーツとしての身体各部分の治療を豊富な知識で行っていました。その様子を目の当たりにしたとき、システムで全身を診察でき、さらに、膝や頸（くび）、腰、手足といった身体の各パーツにおいても全身を診察できて、初めて医師としては一人前と言えのではないかと思えたのです。

その知識と技術を獲得するには整形外科以外には考えられないと思い、整形外科への転科を決意しました」

**開業を決意させた
思いも寄らない現実**

その後、香川医療生活協同組合高松平和病院、香川勤労者医療福祉会高松協同病院などへの勤務を経て、脊椎脊髄病の臨床経験を積んだ吉村氏。06年には、永久就職をする覚悟で門を叩いた病院があったが、そこに待ち受けていたのは、思いも寄らない現実だった。

「最初、私はあくまでも整形外科医として同病院に就職したはずでした。しかし、いざフタを開けてみると役目として整形外科の患者さんの主治医にならなければならない現実があった。」

「私は、『診療一笑い』（一回の診療につき必ず一回は笑いをとる）という、医師になって以来ずっと心がけてきた。」

るより、手術時の麻酔を担当することがほとんどでした。病院の経営やスタッフの配置を思えば致し方のないことだったとはいえ、内心ではこれでまた振り出しに戻ってしまったと、とても複雑な心境でした」

就職してわずか数カ月足らずで、同病院における自らの役回りを理解した吉村氏は、それまでまったく考えたこともなかった「開業」という選択に向けて、大きくシフトしていくことになった。

「私には、『診療一笑い』（一回の診療につき必ず一回は笑いをとる）という、医師になって以来ずっと心がけてきた。」

診療一笑い 患者もスタッフも満足させたい

吉村整形外科醫院（香川県）

院長 吉村 裕 氏



「『診療一笑い』をモットーに診療に取り組み吉村裕氏。開業については、いっさいの妥協は許さず、土地、建物、内装、備品一つひとつに自分の理想を追求し、夢を実現させた。」

昼休みを利用して訪問診療を行ったり、休日にも手術や救急病院へ宿日直で勤務に出かけたりなど、勤務医時代よりも忙しくなったと言う。そんな吉村氏に開業への思いをうかがった。

カフェのような こだわりのクリニック

「私は、医局を辞めた後、市中病院に就職していますから、一般的に見れば『アウトロー的』な存在だと自分では思っています。ですからおのこのこと、開業するからには中途半端なことではできないという、見栄というか、対抗心のようなものがありました。特に、私は何事も形から入る人間なので、クリニックの建物にはとことんまでこだわり抜き、使えるお金は全部使ってしまった（笑）」

ガラス張りの壁面と、あえてむきだしにされた木製の柱のコンビネーションがモダンな印象を放つ「吉村整形外科醫院」（整形外科・リウマチ科・リハビリテーション科・訪問診療。中央に大きなつくりつけのテーブルが置かれた待合は和気あいあいとしたムードに包まれ、お茶かコーヒーでも出てきそうな、しゃれたカフェのような印象を醸し出している。

「この建物を建てる前に、大手ハウスメーカー3社でコンペを行いました。どこも似たりよったりでした。待合とリハビリ室を壁で仕切らずに空間的につなげるような発想を期待していたのですが、そういったメーカーは、残念ながら1社もありませんでした。結局、7年前に自宅の建築を依頼した地元の



▲待合の大きな机は、患者同士の憩いの場になっている。テレビを設置していないのも、吉村氏のこだわりだ。

工務店さんと設計士さんに相談して、侃々諤々の議論を繰り返した結果、ようやく納得のいくものをつくり上げることができたのです」

そうやって、胸を張る院長の吉村裕氏は1963年生まれの46歳。88年に香川医科大学（現・香川大学）医学部を卒業後、同大学麻酔・救急医学講座に入局。以降、8年間にわたり、麻酔救急、ICUの3つの現場に携わった。もともとは精神科志望だった吉村氏が、正反対とも言べき科を選択したのは、このような理由があったという。

「今後、医師としてのような道へ進むにしても、自分が発した言葉が患者さんに多大な影響を及ぼしてしまう現実を前にしたときに、たとえ医学部に6年間通ったとはいえ、もうちょっと人生経験を積んでおく必要があるだろう



●院長：吉村 裕（よしむら・ゆたか）氏

1963年生まれの46歳。88年に香川医科大学（現・香川大学）医学部を卒業後、同大学麻酔・救急医学講座に入局。その後、明石市立市民病院、国立療養所香川小児病院、香川大学医学部附属病院集中治療部勤務の後、96年整形外科に転科。香川医療生活協同組合高松平和病院、香川勤労者医療福祉会高松協同病院などの勤務を経て、06年に医療法人社団聖心会阪本院へ就職。08年4月、吉村整形外科醫院を開業し、現在にいたる。

麻酔科標榜医、日本整形外科学会専門医、日本整形外科学会認定リウマチ医、日本整形外科学会認定脊椎脊髄病医、日本整形外科学会認定運動器リハビリテーション医、日本リウマチ学会専門医。

- 勤務医時代との大きな相違点 -

- ◆患者さんとの接し方がソフトになった。
- ◆休診日の手術や、救急病院への宿日直勤務など、勤務医時代よりも忙しくなった。
- ◆年間を通じての、患者さんの外来変動を気にするようになった。



吉村整形外科醫院

- 診療科目：整形外科・リウマチ科・リハビリテーション科
- スタッフ：看護師3人、事務4人（すべて常勤）
- 主要設備：電子カルテ、デジタルX線画像診断システム、レントゲン、エコー、ウォーターマッサーベッド、血圧脈波検査装置
- 所在地：香川県高松市木太町5055-4
- TEL：087-866-6666
- URL：http://www.yoshimura-seikei.com/

「水曜日の午後と日曜日は休診していますが、水曜日は月4回のうち3回くらいは手術がありますし、土曜日の夜から日曜日にかけては救急病院に泊まりがけの勤務に出ています。また、近くにある住宅型老人ホームの連携医療機関にも指定していただいていますので、昼休みを利用して訪問診療に出かけることも珍しくありません。自宅がクリニックから徒歩2分と近いこともあり、逆に勤務医時代よりもかえって忙しく働いている状況です（苦笑）」

それでも、念願だった「職住近接」が実現し、家族との憩いの時間が多く持てるようになったぶん、本人のストレス解消や仕事への活力につながっているようだ。

では、2つ目の変化はいったい何かという――。

「患者さんへの接し方という意味では、以前よりかなり我慢するようになりましたね。私は、自分が正しいと思っていることはきちんと相手に伝えたいし、あやふやなままにはしておけないところがあります。」

たとえば患者さんが『もう年だからしょうがないかしら』などと弱音を吐こうものなら、『いや、それは年じゃなくて、どこそこが悪いから、そこを治さなアカンのや』などと、ついついきつい口調でお説教をしてしまうことが多かったのです。開業してからは、なるべくそういうことは減らすように注意しています」

患者に対して耳の痛いことが言えるのも、両者の間に揺るぎない信頼感があればこそで、それだけ真剣に医療に取り組んでいる「証し」と言っても過

言ではあるまい。

今後については「今やっていることをこれからも粛々とやっていくだけ」と控え目に抱負を語る吉村氏だが、目下、クリニックをオープンして1年未満の開業医ならではの言うべき、こんな不安を抱えているという。

「昨年4月の開業以来、10月までは順調に患者さんが増えていたのに、11月になるとやや減少傾向になりました。12月からはまた増加に転じて、今年の2月までは順調だったのも束の間、3月に入るとまた少し減ってしまいました。今後、年間を通しての患者さんの大きな流れと言いますか、おおまかな季節変動がデータとして蓄積されていくことで、不安は解消されるとは思いますが、患者数の変動が私の体重の変化にも連動していました（笑）」

現在、同クリニックは、医師1人、看護師3人、事務4人というスタッフによって運営されている。経営的な負担を度外視してあえて全員常勤にこだわっているのは、「スタッフにはヨシムラファミリーの一員になってほしい」という吉村氏の考え方によるものだ。クリニックの2階につくられた、通常のマンションのリビングほどもある広々としたスタッフ休憩室を見れば、その思いが伝わってくる。

「やはりスタッフがやりがいを持ち、待遇や環境面で充実感を感じていなければ、患者さんを満足させられるサービスを提供することなんてできないと思っていますから――」

そう言って笑った眼鏡の奥で、吉村氏の瞳がキラキラと輝いていた。

文・七瀬 恭一郎／撮影・柴谷 浩也

「全部で約200坪ある開業地は半分購入、半分賃借です。初めからビル診や普通の一戸建てで開業するつもりはなかったもので、建物や医療機器はもちろん、駐車場のデザインやスリッパ入れ、家具などの内装に至るまでいっさい妥協しませんでした」

そうして、08年4月に産声を上げた吉村整形外科醫院には、明るい日差しがさんさんと降り注ぎ、まるで青空に直接つながっているかのような爽やかな開放感にあふれた、気持ちのよい空間が広がっている。その一方で、待合

とリハビリ室の間にわずかな段差が設けられているため、お互いの視線が気にならずにすむ優しい配慮が生きている。まさに、吉村氏の「夢」と「こだわり」が詰め込まれた究極のクリニックと言えるだろう。

「カフェのような雰囲気大切にしたいかったので、待合にはあえてテレビは置きませんでした。それでも、患者さんたちは退屈するどころか、見知らぬ人同士で会話が弾んだりすることもあるようで、本当にうれしい限りです」

取材時（開業11ヵ月目）における同クリニックの1日の平均患者数はおよそ60人。すでに損益分岐点はクリアしているというから優秀だ。

「私自身、待たされるのが大嫌いなので、できる限り患者さんは15分以内で診察できるように努力しています。しかし、どうしても患者さんが大勢来られる月曜日や土曜日などは、お待たせすることになり申し訳ない気持ちでいっぱいになります。今後は、これまでに以上にスタッフの動線や電子カルテの運用方法などを改善して、待ち時間の短縮に努めていきたいです」

年間を通じての患者の流れを知りたい

そんな吉村氏が開業して勤務医時代とは変わったと感じているのは以下の2点だ。



▲診察室は2部屋ある。動線もよく、移動も便利だ。



▼処置室は診察室とつながっていて、ムダがない。
▼スタッフ用休憩室。ベランダも広く、ベッドも1台設置されている。



▲スリッパ入れにも吉村氏のこだわりが見える、明るい玄関。



▲右側の小窓は、検尿コップが置けるようになっている。



▲管球の前後動ができ、テーブルもフリーに動かせる。



▼待合からリハビリ室まではスロープでつながっている。